



雄山閣
3,800円＋税

日本と東アジアの 旧石器考古学

松藤和人（天文学部教授）著

本書は「はしがき」にも触れているように東アジア旧石器考古学の最新の研究成果を一般の読者にもわかりやすく紹介することを目的として執筆されている。著者の韓国、中国における調査の逸話もふんだんに盛り込まれ、先史考古学に興味がなくとも引き込まれる。

2000年11月、旧石器遺跡発掘捏造の発覚によって約20年におよぶ列島最古の人類史を探る研究のほとんどが水泡に帰した。それから10年を経た現在、日本の旧石器時代研究はその後遺症に苦しみ、この方面の研究

はいたって低調である。

こうした閉塞感を打ち破り、研究を前進させる一つの突破口として東アジアの視点からの研究がある。日本列島は周囲を海で囲まれ、グローバルな気候変動とリンクしながら大陸との接続・断絶を繰り返した。人類の渡来を考える際、大陸側の動向を無視できない。

著者は進展著しい中国・韓国の研究成果に照らして列島の旧石器文化を相対化する視座を提唱する。著者を中心とする学際的研究チームは、韓国・中国をフィールドに精力的な国際共同研究を推進し、多くの成果をおさめている（『東アジアの黄土—古土壌と旧石器編年』2008年、雄山閣）。

本書は、こうした最新の研究成果をわかりやすく紹介するとともに、今後の列島における前・中期旧石器研究の方向性と展望を明示する。

麻柄一志（魚津市立図書館長）



知泉書館
9,500円＋税

中国古典社會に おける佛教の諸相

西脇常記（天文学部教授）著

「中国古典社會」、すなわち儒教やその古典を中心とする伝統社會を、古代中国の表顔とすれば、仏教や道教などの民間宗教に根ざした社會はその裏顔と言えよう。本書はその裏顔を觀察すべく、唐宋時代の仏教中国化の実態を複眼的に照射した碩学による渾身の力作である。

第1部では、宋代の宗鑑『釈門正統』や志磐『仏祖統紀』を主軸に、天台宗史書の成立事情や変遷を詳論する。第2部は、著者が以前から有してきた中国人の死生観の解明という問題意識の延長で、唐代仏教徒の葬喪儀礼や遺産処理の実態を克明に

描いた上、さらにエリート官僚かつ文学者である楊億と権徳輿の夭折した各々の子供への思いを通して、深い儒教的教養を持つ知識人の仏教的立場を鋭く分析した。そして近年著者が最も力を入れたのが第3部、つまりベルリン所蔵トルファン漢語仏教文書についての研究である。

文献考証的手法による調査結果は、写本はもとより、版刻本の意味をも注目し、当該分野において新しい研究方向を指し示したと思われる。

ただ、第3部所収「『仏母經』の伝承」は上海博物館所蔵の五代の西域写本「仏母經」（上博48—41379—14）を見落したなど、多少残念なところもあるものの、中国への情熱を持ちつつ、冷静さを失わずに、緻密な考証に裏打ちされた深い洞察と卓見が溢れる本書は、専門家のみならず、一般読書人にも中国理解の裨益をもたらすものであると信じ、江湖に広く薦める所以である。

石 立善（天文学部外国人研究員）

「宇治拾遺物語」の 中の昔話

廣田 收 (大文学部教授) 著



新典社
1,000円＋税

一般に説話はどう理解されているのだろうか。芥川龍之介が描いたような庶民文学。あるいは昔話や伝説、当時語られた噂話の記録というイメージだろうか。事実、鎌倉時代初期に作られた『宇治拾遺物語』には、われわれが知っている昔話によく似た説話が収められている。本書にも取りあげられる「瘤取爺」「藁しべ長者」などだ。

しかし、これらの説話が実際に当時語られていたのかどうか、それとも説話をもとにして昔話が作られたのか、検証は難しい。現在伝わる昔話の多くは明治以後に記録されたもので、近

世後期以前に語られていたかどうかはわからないのだ。

本書はしかし、あえて『宇治拾遺物語』と昔話との比較を試みる。その際、本書が用いるのが「話型」という概念だ。

基本的に昔話は口頭伝承である。したがって地域や話者により微妙に表現が異なってくるのだが、共通する基本の構成「話型」をとりだすことで中世説話との比較も可能になる。よく似た構成の説話表現と昔話の表現を比較することで見えてくる違いこそ、それぞれの独自性というわけである。

具体的な分析の手際や成果については本文をお読みいただきたい。説話研究は国文学の領域ではまだ研究史が浅く、入門書の数も少ない。そのなかで本書は、易しい語り口ながら重要な示唆に富んでいる。著者の研究人生にまつわる挿話なども折々紹介され、説話研究の入り口にまずお勧めしたい一書である。

久留島元 (天文学部博士課程後期課程)

永井荷風・ ジャンルの彩り

真銅正宏 (大文学部教授) 著



世界思想社
2,600円＋税

本書の特徴は、永井荷風というひとりの作家から生み出された作品群を、四つの表現スタイルⅡ文体と、11種類の文章ジャンルに「再分類」した点にある。通読すると、荷風が、明治30年代のデビューから昭和に至るまで、まさしく日本語の文体模索の時代を生き、また、文学史的な流れに緩やかにアクセスしながら自らの表現ジャンルの変奏のうちに長く作家であり続けていたことにあらためて気づかされる。その時「永井荷風」という作家名は、単一なイメージとしてではなく、その文学的な「複数性」すなわち「彩り」のうち

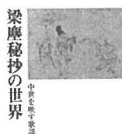
に、きわめて刺激的に立ちあらわれる。

荷風没後50年を機にまとめられた本書は、著者にとつての初めての単著『永井荷風・音楽の流れる空間』(1997)から10年あまりの時を経て刊行されたわけだが、真銅氏は、この間に「ベストセラー小説」「食通」「都市」といった幅広い切り口による著書を立て続けに刊行し、学界で高い注目を集めてきた。

一見、そうした実践がぐるりと一周して荷風に戻ってきた、という印象を抱く向きもあるが、おそらくそういうことではないだろう。本書は、多才・多彩な著者からすると、きわめて禁欲的に「文学」の内側に踏みとどまり、「作家名」にこだわった研究の成果といつてよい。著者にとつて「荷風」の「文学」とは、研究の底流を流れ続ける大きなテーマであり、かつまた、その研究実践を鍛える場のようなものではないか。本書は、その一端を知る上でも格好の書物にちがいない。

日高佳紀 (奈良教育大学准教授)

植木朝子



梁塵秘抄の世界

角川学芸出版

1,500円+税

梁塵秘抄の世界

中世を映す歌謡

植木朝子 大学文学部教授 著

本書は、平安朝の中期に現われ、院政期にかけて爆発的に流行した今様の集成『梁塵秘抄』に関する研究で、内容は「I・『梁塵秘抄』概説」と「II・『梁塵秘抄』を読む」の二部からなる。

Iでは今様流行の動機と『梁塵秘抄』の成立、撰者後白河院の周辺などの基盤の問題が、最新の研究成果を踏まえて、平易な文体で述べられている。読者はこれに導かれて今様の世界に分け入ることができる。IIでは、「信仰の世界」「恋の世界」「王朝の美意識への反逆」「都市の賑わい」の各章に沿って、雑多とも見える今様の世界が体系的に開示される。ここでは読者は、一つひとつの今様の解釈と分析

の手順に導かれ、そのことばと息遣いに触れつつ妙味を味わうことになるであろう。

歌謡群ごとの丁寧な論証は、新たな美意識や価値観のもとにまさに中世的世界を拓いてゆくことばの波打つ鼓動を感得させてくれる。仏菩薩への敬虔な祈りとあからさまな愛欲の願いとが共存している今様世界の不思議さや疑問は、例えば、極悪人提婆達多の成仏に共感し、称える歌群の分析などを読むと、見事に氷解させられる。生きること自体が悪業でさえある状況を歌いあげ、救いの方便として転換させるかのような今様のあり方が見えてくるからである。信仰と欲望といった規範的な区分などとは、そこにはない。

和歌、物語、説話、仏典、史書、図像資料など、全般に資料の博搜性も本書の特徴である。ことに資料を開陳し、分析するときの筆者は愉快でたまらないらしく、すこぶる雄弁でもある。その語術に誘われて分析の臨場感を共有できるのも本書の魅力であろう。

駒木 敏 大学文学部教授

佐伯順子



女装と男装の文化史

講談社

1,700円+税

『女装と男装』の文化史

佐伯順子 大学社会学部教授 著

本書は、ジェンダー表象のひとつ、女装と男装という文化現象を読み解こうとした著作である。一般には異端とみなされ時には排斥の対象とさえなりかねない性のねじれ現象に、文化史の光をあて、その深層に探りを入れようとする試みである。

とりあげられた素材は多種多様だ。文学、映画、演劇は無論のこと、歌舞伎、歌謡、マンガに至るまで、古今東西の作品が自在に引用されている。

「古記事」「ヴェニス商人」、そして「リボンの騎士」「ペルサイユのばら」など、私たちに

著者の手によって、ひとつの性文化の系譜のなかに位置づけられていく。

こうした分析を通じ、日本独自という装いをもつ作品も、実際には世の東西を問わぬ、人間の共通した感性の産物であることが示されていて興味深い。

人は人としてあるかぎり、同じような文化を生み出す。また仔細にみると、男装と女装には親和性のあるメディアが異なる。さらに東西では微妙な差異のあることも指摘されている。

女装や男装は、芸術的なまた大衆向けの作品にしばしば現れる。時に宗教的なバックボーンも支えられてもいる。それは意識するしないに関わらず、それは私たちにとって身近な現象であり、「人間と社会の根源を問う問題である」という指摘は重要だ。

比較文化を専門とする著者ならではの成果と言えよう。

竹内長武 大学社会学部教授

アメリカ・ロー
スクール教育論考

川嶋四郎（法学部教授）著

アメリカ・ロースクール
教育論考

川嶋四郎

弘文堂
8,000円＋税

法科大学院教員のどれだけが、「学生の背後に潜在的な依頼者を見て」授業を行っているであろうか。著者は本書はしきりに「専門職大学院である法科大学院では、他者の生命・身体・自由・名誉・財産などの関わる問題について法的救済を創出できるようにサポートすることができ、できる人材を育成しなければならぬ」と記す。

本書は、いま岐路に立たされている法科大学院制度を、その設立当初の理念に戻って検討するための書である。法科大学院は、プロフェッショナル・スクールとして、依頼者のために「社

会生活上の医師」たる法律家を育てる教育機関として成長しているか、それとも、法学部の理論教育を単に延長し、また実務の現状を無批判に見習う司法修習の準備期間となってしまうかの岐路にある。

日本の法科大学院は、アメリカのロースクールをモデルとしたといわれる。しかし、それは大学院レベルの教育としたことと、修業年限を3年とした制度の外面だけのことである。アメリカのロースクールの成功の鍵となっている教育方法論の特徴を、本書を紐解くことによって再確認しなければならない。教員の指導監督の下に学生が現実の依頼者に対して法律サービスを提供する臨床法学教育（リール・クリニク）もまた、本書がその有効性を論ずるアメリカのロースクールの教育方法論である。著者のいう「学生の背後に潜在的な依頼者を見て」、理論教育と実務教育を統合する方法論の検討が必要である。

宮川成雄（早稲田大学法学部教授）著

明治思想史の一断面

新島襄・徳富蘆花
そして蘇峰

伊藤彌彦（法学部教授）著

晃洋書房
2,300円＋税

歴史の歯車が大きな音をたて転回するとき、たまたま遭遇した時代の中で星雲の志を抱く若者たちはどのように生きたか。建立間もない同志社英学校にゆかりの深い3人とは私立の学校事業に生涯をかける新島襄、心情告白の作家となる徳富蘆花、そして国民新聞社を設立し活躍する蘇峰。本書はこの人物たちの苦闘の人生行路を丹念に精査し、読み手を納得させる彼らの「心の構造」、つまり内奥の葛藤にまで踏み込んで活写している。新島の場合、不法出国した後米国船での体験やキリスト教の

影響の強いアメリカ社会での生活と学校教育によって日本社会の因習や伝統に縛られた規範と価値との落差を実感し、キリスト者として「一人の自由な日本市民」を目標に生きる。一方、徳富兄弟の場合、兄蘇峰は襄の学校事業のよき理解者として、また弟蘆花のために尽力した様子が実証的な筆致のもとに描写される。なるほど本書の特徴とは、時代環境と若者の精神形成との交錯の様相をそれぞれの内面の苦悩を照射することと絡め生身の人間の躍動が表現されたことだ。とくに蘆花の痛ましい幼児の性体験が作家活動の原点（女性恐怖症）にあったとの指摘には著者の熟達した手法の冴えがみられる。

新島のような高邁な理想を掲げた熱血漢の生き方や、自己救済の模索が作家の道となる蘆花らの人生の断面への洞察。それは、現代に通底する若者の生き方に示唆をあたえるにちがいない。

中谷 猛（立命館大学名誉教授）著



リスボン条約による 欧州統合の新展開 EUの新基本条約

鷲江義勝 大学法学部教授 編著

EU基本条約を改定するため、2009年末に発効したリスボン条約は、10年にわたるEU改革の集大成である。本書は、21世紀のEUの基礎となるリスボン条約について、その内容を解説する一方、EU基本条約改定の軌跡を条文の変遷を示しながら明らかにするものである。

本書の第1部では、リスボン条約の構成を踏まえたうえで、条約批准過程など成立に至る経緯を丁寧に解説している。また、大幅な改革がなされたEUの諸機関、諸政策について詳細な検討がなされている。現在、27カ

国体制となったEUでは、意思決定の効率化を促進する一方で、民主主義的正統性のさらなる確保という難しい要請に迫られている。欧州理事会常任議長設置、欧州議会の権限拡大等、リスボン条約で導入された改革に関する理解は、EUの将来を展望するうえで重要であろう。

第2部では、リスボン条約によって改定されたEU基本条約全文が掲載されている。本書の特徴は、リスボン条約以前のニース条約とアムステルダム条約を比較可能な形で並べて掲載した点にある。これにより、3条約を比較対照し、これまでの条約改定でEUがどのような変容を遂げたのか把握することが可能となっている。EUは半世紀以上におよぶ欧州統合の歩みの中で大きな変貌を遂げてきた。本書に示された3条約の条文を比較検討することにより、読者はEUの発展について体系的な理解を得ることができるだろう。

力久昌幸(大学法学部教授)



数理神学を 学ぶ人のために

落合仁司 大学経済学部教授 著

本書は、かねてから「数理神学」を提唱してきた落合仁司教授による数理神学入門書である。数理神学とは神論、三位一体論、キリスト論などの伝統的な組織神学の主題を、数学的に表現した公理、定理に再構成し、検証する試みである。

まず最初に「神は無限集合である」という命題が仮説として設定される。そこから著者は「無限集合の限界は自己自身である」という命題を集合論を用いて演繹し、そして「神の限界は神自身である」という結論にいたる。これにより無限である神は、無限でありながら有限を有

するという弱さを持つこと、すなわち人と共に苦しみ、人を愛するといったいわゆる「十字架の神学」が数学的に論証される。さらに「無限集合の部分是自己と同一である」という命題から、神を無限集合とするならば、神の部分は自己と同一であるゆえに、父・子・聖霊の三つの位格を持ちながら、本質としては一つという三位一体論が証明可能になるとされる。

著者は、近代科学の言語である数学を用いて神を語る数理神学によって、神と近代科学は共通の地平において記述できるようになり、神の存在する余地を否定する科学的の世界像の是非を問える」と主張する。こうした主張は独創的であって、その評価は当面のところ一定しないだろう。だが近代以降絶えず繰り返られてきた科学と神学をめぐる論争は、双方からの議論が払底した感がある。それゆえ、本書の意義はこの閉塞状況を打破する可能性を切りひらく一石を投じたことにあると言える。

伊藤慶郎(大学神学研究科博士課程後期課程)

日系カナダ移民の社会史

末永國紀

ミネルヴァ書房
6,500円+税

日系カナダ移民の社会史 太平洋を渡った近江商人の末裔たち

末永國紀(大学経済学部教授)著

私の友人である末永國紀教授は日本経営史の専門家であり、滋賀県を出身地とした近江商人の研究者として知られている。

彼が日系カナダ移民に関心を持った契機は、第二次大戦以前の日系カナダ移民に滋賀県出身者が最も多いという事実を知ったことに基づいている。もともと、近江商人はビジネスの広域志向性に特徴があると考え、近代以後の近江商人の海外進出に関心を持っていたことから、滋賀県からの移民がビジネスで如何にカナダに定着したのかという問

題意識が研究の出発点であった。彼の研究方法は史実に基づく徹底した実証研究であり、カナダ

の調査でも第一次史料を重視して15年にわたって広大なカナダを駆け巡っている。その研究成果は6本の学術論文として公表されたが、本書はこれらの論文を体系的に取り纏めたものである。カナダの発展に尽した日系カナダ移民に対する敬意と深い愛着が、長年に渡る研究を根拠から支えた動因である。このように、本書は堅実な実証に支えられた5章から構成される研究書であり、今後とも日本におけるカナダ研究の貴重な文献の一つであり続けることは疑う余地がない。本書を手にしたとき、著者のご家族とともにカナディアンロッキーズを旅したことを思い出し、ご研究の成果を集大成されたことに大いなる敬意を表したいと思う。本書は慶應義塾大学図書館の蔵書の1冊として閲覧に供されている。

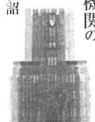
今口忠政(慶應義塾大学商学部教授)

東京大学

エリート

養成機関の盛衰

橋本俊昭

岩波書店
2,600円+税

東京大学 エリート 養成機関の盛衰

橋本俊昭(大学経済学部特別客員教授)著

この本は、東京大学の卒業生が社会のどのような分野で活躍してきたのかを帝国大学としての誕生期から今日までを観察した作品で、随所に面白い記述がちりばめられている。東京大学を語りながら日本の社会の変遷を描くことに成功している。

例えば、①東京帝大法学部から高等文官試験を合格し高級官僚になる経済的インセンティブが戦前、特に明治期には非常に強かったこと。平均給与月額で製造業男子を1としたときに、1900年(明治33年)でみると勅任官(上位の局長以上)は

30.7倍、奏任官(中堅管理職)でも8倍もあったこと。②旧制高校への進学率は同年齢人口の1%未満であったこと。隔世の感とはこのことだろう。

しかし、私はこういう統計数値だけではなくて、事実の解釈に橋本さんのお人柄が伝わる記事にかえって興味と安心を覚えた。例えば、小生が在学していた頃までの東大経済学部のマルクス経済学優位の状況について、学問の単純な有用論からすれば切つて捨てるような評価もありうるだろうけれど、卒業して経営者になった人々は「マルクス経済学という階級対立のデメリットを学生時代によく学んだだけに、現実の世界ではそのデメリットを消すような政策を採用した」という解釈。氏のリベラルな思潮が彷彿とする。橋本さんの飾らぬお人柄が映し出されていて、とげとげしさのない好著であると思った。一読をお薦めしたい。

石田光男(大学社会学部教授)

ハイエクの
社会理論

自生的秩序論の構造

森田雅憲

※中絶版

日本経済評論社
4,800円＋税ハイエクの社会理論
―自生的秩序論の構造―

森田雅憲（大学商学部教授）著

ハイエク思想という大山脈は、経済学・政治学・法学から、心理学にまで広がりを持ち、方法論・知識論および、自生的秩序論を核にした社会理論という豊かな水脈をたたえている。魅力的で、それゆえにこそ学者にとっては危険な大山脈だ。

しかし、「ハイエクと出会うために彷徨っていた」（あとがき）という著者は、この大山脈を見事に踏破した。

ハイエクをよく知る者にとつては、スリリングな本である。

手堅い研究書を装いながら、論争的で挑戦的な主張が随所にちりばめられている。ハイエク思想における『感覚秩序』の位置

づけなどは、斬新で説得力に富む。本書によって、ハイエクをめぐるいくつかの論争に終止符が打たれ、新たなハイエク像が確立されたと言つてよい。

一般の読者も、本書をガイド役にハイエク思想を大いに楽しんでほしい。ハイエクのスミズ解析、市場論を知れば目からうろこが落ちる。設計主義批判は社会主義計画経済の破綻を早くから言い当てていた。とくに勧めは、「自生的秩序」（人間の行為の結果ではあるが人間の設計の産物ではない秩序）という概念を核にしたハイエクの社会理論である。われわれの社会観に確固とした座標軸を与えてくれる。

ハイエクに依拠した新しいパラダイムの構築という野心的で無謀な（？）試みは森田先生に任せておいて、われわれはハイエク思想という大山脈に分け入って知的冒険を楽しもう。道に迷ったらいづつでも本書が導いてくれる。

角村正博（神戸学院大学経済学部教授）

冷泉家蔵番ものかげり

昭和初年～千年代前半

冷泉為人

Arise Kenjin



ADK Kinosho

1991

日本放送出版協会
1,070円＋税冷泉家・
蔵番ものがたり

―和歌の家二千年をひもとく―

冷泉為人 女子大学現代社会学部客員教授 著

近世絵画の研究者で大学に奉職する著者は、冷泉家の婿養子となったことで―昔流に言えば地下人から殿上人へ―藤原俊成・定家父子以来、永年にわたって和歌界をリードし、多くの歌集を架蔵する堂上家の一員となった。姓名ともに変身し、冗談めかしながら「僕の帽子はどこへ行つたのか」と呟く著者をして、「冷泉家の内蔵番に徹した」と言わしめた契機は、藤原俊成が84歳のときに著した『古采風躰抄』（国宝）と対峙した時であった。そして800年

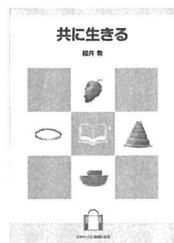
に亘って守り抜いてきた文書・典籍類を次の800年先まで継承する、これが今日の冷泉家の人たちの心意気である。武家社会に入つて多くの公家たちは苦難の生活を余儀なくされたが、徳川家康に定家筆の歌集を進呈するなど幕府との交流を通して多くの門弟を抱え、冷泉家は安寧な日を送った。こうした歴代のためめ努力が長年の維持、継承として結実したのである。

内容の紹介は叶わぬが、「冷泉家千年の歴史をひもとく」「現代に息づく公家文化」の2部構成のもと、俊成・定家の輩出、家の成立、歌道師範の継承、最古の公家住宅の管理、文化財の継承など著述は広範囲におよぶ。これまでも冷泉家に関する著書は少なくはないが、内側から見た冷泉家の諸相が描きこまれた類書はない。本書から、過去の遺産を将来へ引き継ぐことの困難さと尊さが読みとれる。

瀧谷 寿（女子大学名誉教授）

共に生きる

桜井 希(中学校教諭) 著



日本キリスト教団出版局
800円＋税

書名からキリスト教倫理の入門書を連想されるかもしれない。しかし、本書は、聖書に拘りつづけて、生きることの根源的な意味を探究している。

全体は「人間とは何か」「神と共に生きる」「人と共に生きる」「私たちはどう生きるか」の4章から構成されている。また、各章は、「神の似姿として」「自立への旅立ち」「命の原点」「友」となるために」など、全部で24の小見出しによって手際よく論じられている。

ただ、意表をつくのは、聖書物語が各主題に適合するように選択されていないことだ。創

世記、出エジプト記、サムエル記、列王記、福音書を中心に、聖書の配列を侵さず熟読玩味されている。それは、一冊の聖書の構造を先述の主題の連続体として読み解こうとする意欲的な解釈の試みでもある。

著者はユニークな聖書教育の実践者として知られている。本書では、聖書の成立史や解釈史は紹介されていない。それらの解説は類書に委ねられているのだ。むしろ、他者との共生へと導かれることこそが聖書を読むことの魅力なのだという。

共生のためには、痛みを分かち合うことが必要と訴える著者は、その仕方と機微を聖書から学んできたのだろう。読者(生徒)を導こうとするよりも、彼らと「共に」聖書の問いかけに傾聴しようとする著者の姿勢に教えられる。それは、聖書を「共に」して生きてきた著者の、教室における実践の記録なのかもしれない。

中村信博(女子大学学芸学部教授)

31音 青春のころ 2010 「SETO百人一首」の世界 同志社女子大学編



日本放送出版協会(NHK出版)
760円＋税

4冊目となる『31音 青春のころ 2010』[SETO百人一首]の世界(同志社女子大学編)がNHK出版局から刊行された。

『SETO百人一首』2009年度短歌コンクールとして全世界の高校生を対象に作品を募集。

3万首近い応募作品の中から選ばれた100首(内・英語短歌10首)と作歌の背景を記載。

31文字で感性豊かに表現さ

れた高校生たちの「ころ」を味わってください。

読者の皆さんにプレゼントします。

・ご希望の方は、巻末の綴じ込みハガキに「住所」「お名前」「SETO百人一首希望」とご記入のうえ、50円切手を貼り11月30日(当日消印有効)までお申し込みください。

・抽選のうえ、5人の皆さんにプレゼントします。

・抽選の結果は発送をもつてかえさせていただきます。

同志社女子大学
総務部広報課